

人生の折々に「冒険」と呼ぶのにふさわしい経験に出逢うことがあるが、私にとって映画『パロック』はそうした「冒険」の一つだった。映画『パロック』には、せりふがほとんどない。全篇が音楽であり、それもクラシックからラテン音楽まで、音響とリズムの饗宴といつていい。映像もそれに劣らず華麗であり、万華鏡のような一種の多彩な混沌が支配している。

■魔術的リアリズム

この映画は魔術的リアリズムの作家カルペンティエールの『パロック協奏曲』を原作としているが、普通の意味の原作ではなく、メキシコの監督ホルヘ・ルデュークが、自己の問題意識と想像力にまかせて、自由に原作を演奏したものである。

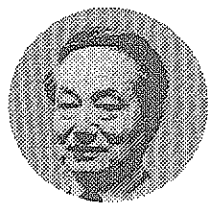
原作では、財産を蓄えたメキシコ人が、黒人の従者フィロメノを連れて、自分の祖先の地スペインに旅をする。しかしスペインに幻滅した男はさらにヴェネツィアにゆく。折しも水の都ではカーニバルの仮面舞踏で湧き立っている。その陽気な馬鹿騒ぎのなかで、男はヴィヴァルディに逢い、メキシコ最後の王モンテスマがスペインの征服者コルテスに滅ぼされた物語をする。ヴィヴァルディは早速

その物語をもとにオペラ「モンテスマ」を作るが、その内容がいい加減なのに腹を立て男はヨーロッパに見切りをつけメキシコに戻ってくる。

ラテンアメリカの悲劇の根

映画『パロック』に見る冒険の意味

辻 邦生



(作家)

(こつと) 品の微細な描写、ヴィヴァルディ、スカルラッティ、ヘンデルの三人が修道女たちと協奏曲を熱狂して演奏するピエタ慈善院、夜明けストラヴィンスキーの墓辺で休む三人のそばを通るワグナーの棺(ひつぎ)を運ぶコ

ンドラー 魔術的リアリズムにふさわしい時間空間の混沌のなかで、こうした映像が、いかにもパロックらしい力動感のなかで、描かれているのだ。

■自己同一性の追究

映画『パロック』は大枠としてこのストーリーを用いるが、カルペンティエールが抑制した限界を、ルデューク監督は大胆に越え、映像的にも、音楽的にも、ラテンアメリカの背負う悲劇的性格を、

極限まで押しすすめる。このラテンアメリカの悲劇的性格とは文明を暴力として経験しなければならなかったことだ。モンテスマとコルテスの関係がそれを端的に語っている。

暴力としての文明に開化された場合、文明がすぐれたものであっても、文明への憎しみは消えない。文明人となった自己も憎むことになる。文明化への同意と否認——この二律背反のなかにラテンアメリカの苦悩がある。

■肉体のリズム返う

暴力的文明化の二律背反 西欧解体する生命力描く



『パロック』の一場面

たえはわれわれ日本人の場合、たしかに西欧文明を規範として模倣したが、体質に合致しないものは切り捨てることができた。そのため西欧は全的に日本に移されず、和風化され、問題も残した。しかし反面、われわれは伝統と文化を保つことができ、日本語を語り、アイデンティティの存在を疑う必要はなかった。

ラテンアメリカの場合は、ヨーロッパは暴力によって直接に接合された。言葉まで失うほど、文明は全的に強要された。当然、広範な混血が起こった。文明のレベルでは、ラテンアメリカは土着人のものか、ヨーロッパに属するものか、混沌として決着をつけることが難しかった。自己表現に用いる言葉が征服者たちのスペイン語、ポルトガル語だった。

日本人なら反西欧の旗をかがけ国粹主義になることも可能だが、

ラテンアメリカではそれができない。西欧は身体と魂と二つになっているからだ。

そこからラテンアメリカの独自のアイデンティティの追究が始まる。カルペンティエールの前記作品で、主人公がオペラ「モンテスマ」のでため息に腹を立て、ヨーロッパに見切りをつけるのも、メキシコのアイデンティティを発見する一つの契機だろう。

映画では、メキシコの男が夢想する形で、時空を越えた幻想が広がる。それは、ヴェネツィアの仮面舞踏と慈善院から、スペインと関係する世界史の情景まで——スペイン内戦も含めて——自在に描かれ、基本として、征服者ヨーロッパがラテンアメリカ的なものの中に解体してゆく過程としてとらえられる。たとえばスペイン王宮の十八世紀の典雅な舞踏会が次第にチャチャチャのリズムに変わり、人々はかつてを忘れて踊り狂る。シューベルトのセレナーデはダンソンに変わり、肉体の強烈なリズムが歌うたい上げられる。

旺盛な南米の生命力が西欧を貪欲に食いつくしてゆくこの変幻する歴史壁画は、それだけで西欧の規範にがんじがらめの日本人に、文化的現実とは何か、という鋭い反省を迫っている。こうした刺激的な誠実に触れること、それ以上に貴重な魂の「冒険」はありえないように思われる。

(映画『パロック』は東京・吉祥寺パウスシアターで上映中)

藤原歌劇団公演、ヴェルディ作曲『オテッロ』を見た(26日・東京文化会館)。

ウラディーミル・アトランツフ(レニングラード生まれ)のオテッロ役が、見もので、かつ聴きものだった。張りのある声と綿密な

「全体主義の時代」を検討

日独学者のシンポジウム

第一次大戦以後のドイツと日本。ともに全体主義の道を歩んだこの時代に、どんな精神・イデオ

ロップはそれぞれの指導者像を彼として日本精神という概念をつくり重ね合わせた。ヒトラー個人の考えを吟味することを怠ったから、制と神道を中核に持つ概念で、

ドイツ側には疑問が残ったよう。この点は昨年のシンポジウムで、臣民教育をめぐる議論されてはいるが。

近代以来の中心勢力だったヨーロッパに対して、ドイツも日本も複雑な態度を取ってきた。マインツ大学のカール・ルドルフ・コルテ研究員は、ヨーロッパと東方世界の接点に位置した歴史も提出されたが、コルテ氏は「下

音楽 嫉妬を丁